

指導医養成のためのワークショップの報告

佐賀県臨床研修運営協議会^(*)の主催で、平成22年1月9日(土)および10日(日)に武雄温泉ハイツにおいて、「指導医養成のためのワークショップ」が開かれました。このワークショップは、厚生労働省医政局長より、「医師の臨床研修に係る指導医講習会の開催指針」に則ったものであるとの認定を受けており、今回が7回目となりました。

臨床研修医の指導医として適切な指導を行うために、教育理論に関する基本的な知識や教育技法を身につけることを目標としています。具体的には、教育カリキュラム(プログラム)作成、研修医指導に役立つコーチングやフィードバックの技法を身につけるための講義・模擬体験、現状の問題点に対する改善策の討論などをします。

県内を中心に7医療機関から26名の7年以上臨床経験のある医師が2日間、早朝から夜まで“缶詰め”状態となって、グループ討論や発表などを行いました(その内、現在佐賀大学勤務中の医師は12名)。



ワークショップに参加するだけで、突然、良い指導医が出来るようになるわけではありませんが、指導する側の医師が、忙しい合間を縫って、かつ連休をつぶしてまで、勉強しているという事実があることを、医学生・研修医の皆さんを含め、多くの人に知って頂きたいと思います。

(江村 正, 吉田和代)

(*)佐賀県臨床研修運営協議会は、佐賀県における臨床研修体制の整備・充実を図ることを目的として、平成15年に設立され、佐賀県医師会、佐賀大学病院、佐賀県立病院好生館などの研修病院により設立されました。

内閣府青年国際交流事業 カンボジア派遣

昨年の9月、私は18日間内閣府主催の青年育成事業に参加し、カンボジアに行ってきました。この青年育成事業は全国から10名ずつカンボジアをはじめ他3カ国に日本人の青年を派遣するというものです。

カンボジアは、アンコールワットをはじめとする素晴らしい世界遺産がある一方で、ポル・ポト政権による大虐殺、

内戦など暗い過去も持っています。私はカンボジアの同世代の人や小・中学生の他、カンボジアで働く日本人などと交流しました。世代は違ってもカンボジアの人々の心に強く根付いているのは仏教です。町のいたるところに寺院があり、学校の集会では念仏を唱え、目上の人を敬うことは当たり前、自分より貧しい人にはお金を渡すという考え方のあるとても温かくて、おもしろい国でした。そして、どこに訪問しても現地の方と一緒にやることになるのが、クメールダンスです。これはアンコール時代からの伝統的ダンスで、日本でいうと盆踊りのようなものです。皆で輪になって「アラッピーヤ」と歌いながらダンスをします。このダンスはリズムを感じて踊るのではなく、感覚で踊るのでとても難しいのですが、18日間毎日のように踊っていたので、帰国する頃には現地の方にも負けないほど上達しました。



そして、もうひとつ忘れていけないのがカンボジア青年の向上心です。ユース・リーダーズ・フォーラムという3日間のプログラムで、カンボジア青年とルームシェアをしながら様々なディスカッションを行ったのですが、ほとんどの青年が「自分たちが国を変える。国を発展させる。」と話したのでした。彼らは、国民の3人に1人が虐殺されたポル・ポト政権時代を知りません。しかし、そのために人材不足に陥っているカンボジアの未来のことを考えています。彼らは、戦後急成長をとげた日本を見本としていました。でも私は日本人として日本のことを真面目に考えたことはなく、彼らの向上心や国を思う気持ちが新鮮に感じられました。

カンボジアといえば、「地雷」や「アンコールワット」と



という言葉が浮かびがちですが、この滞在を通してカンボジアのもっと深いところを見た気がします。本当に言葉にはできない多くの感動をもらうことができました!! ありがとうカンボジア。

(看護学科2年 深村友恵)

教育広報部会

小田康友、池田豊子、市場正良、吉田和代、
江村正、藤田君支、阿部博美

ご意見をお待ちしています (oday@cc.saga-u.ac.jp)

